

社会システム研究科

東アジア専攻

吉森 裕

## 北九州の都市と港湾の計画のあり方に関する提言

### —シンガポールの事例を参考に—

#### 要旨

本研究は臨海部と都市の土地利用に焦点を当てている。北九州市においては、とりわけ都市部と臨海部の土地利用の境界に人口減少がみられる。そのため、本研究は、都市部と臨海部の土地利用の断絶を緩和するような空間のあり方を考え、住みやすく働きやすい、人間中心の土地利用へと変容させていく方法を探ることを目的としている。

北九州市は、四つの海域に囲まれているが、その水際線はほとんどが埋立地で占められ、またその多くが工業用地である。この工業用地を中心とする埋立地は、北九州市の長い歴史の中で拡大されてきた一方で、市民を排除することにつながった。北九州では、1980年代ごろから、河川改修や港湾整備事業の中でWFの整備が徐々に行われてきたが、それらは線的にも面的にも大きな広がりを持つことができず、都市の大幅な魅力向上や新しい経済を生み出す空間にはなっていない。

北九州市が工業用地の造成に偏向してきた点や、海や川の水際線を有効に活用しきれてないという点は、それらに関わる都市計画のあり方、港湾計画のあり方に大きな問題があると考えられる。では、これら計画のどのような点に問題があり、それをどう改善していくべきなのだろうか。

そのため本研究では、北九州市の都市部と臨海部の境界に着目しつつ、そこでの土地利用の分断、空間的き裂がどのように生じてきたかという点と、広大な臨海部空間の中で行われた響灘ハブポート構想がうまくいかなかった理由を検討しながら問題点をより明確にしている。

響灘ハブポート構想は、まさにグローバルゼーションを表徴するプロジェクトであったと考える。残念ながら、結果的にはうまくいかなかった。筆者としては、北九州市の響灘地区の土地利用や利便性の低さ、都市環境整備の水準の低さこそが最大の要因であったと考えている。

都市環境整備については、シンガポールの都市政策とくに土地利用計画のあり方を探ることが、今後の北九州の都市と港湾空間のあり方に示唆を与えると考えている。シンガポールは、グローバルシティとして評価され、住みやすさ、働きやすさといった点で世界の上位の都市に位置している。また、港湾も、その取扱量や効率の良さから世界のトップを争っている。世界中の人々を集めることができるのは、シンガポ

ールの空間構成、とりわけシンガポールの都心部における河川や海辺の土地利用であると考える。

本研究の構成については、以下のとおりである。

第1章は研究の背景と目的、構成、先行研究について述べている。

第2章は土地利用の分断と人口減少について考察している。

港湾空間を変容させる要素はいくつか考えられるが、とくに北九州の港湾整備の経緯から、北九州の都市構造がどのように形成されてきたのか、北九州の工業立地と港湾整備がどのように土地利用の分断と人の排除につながったのかについて論じている。

第3章では、響灘ハブポート構想の内容と結末についてみていきながら、うまくいかなかった原因といわれる集貨の問題、規制緩和の問題以上に、北九州響灘地区の都市環境にこそ最大の要因があったと思われ、その点について論じている。

第4章では、グローバルシティとしてアジアでトップクラスのシンガポールの都市政策についてみていき、どのような土地利用計画やそれに対する配慮が世界中の人々を集め魅了するのかについて考察している。

とくに都心部の河川とベイエリアにおけるWFの利用と制御の方法について調べるとともに、シンガポールの工業団地と住宅地の設けられたある地域核が周辺との境界をなくしていることにも注目して言及している。

第5章は北九州への提言である。都市と港湾を取り巻く環境は、技術の進歩や情報化のみならず、グローバリゼーションが都市空間にも変容を迫っている。こうした状況の中で、世界の人びとを集め、新たな魅力と経済を生み出せる都市・港湾空間とはどのようなものかという問いを立て、具体的な方策として土地利用に関する提案を行うとともに、これからの港湾管理者のあり方について考察している。

これからの都市と港湾の計画のあり方としては、世界の人々に魅力を感じてもらい、さらにそこが経済を生み出せる方法を真剣に探っていく取り組みこそが必要であって、都市全体が一体となって魅力ある空間構造を備えた都市環境を漸進的に創造していくべきであると述べている。